美術科教育学会通信

１９９６年１２月２０日発行　　美術科教育学会本部事務局　　Ｎｏ．２３
〒１８４　東京都小金井市貫井北町４丁目１－１　東京学芸大学
美術科教育学研究室内　Tel.0423-25-2111（内）2856,2857,2858　　FAX. 0423-21-3739

私の中の美術科教育学会

武田　薫（北海道教育大学旭川校）

はじめてこの学会に参加したのはたぶん第２回目で、大阪教育大の院生の時であった。そこでの、学部のおり講師として教科教育法を大勝先生のテキストで教えて下さった鈴木先生、また大教大の花篤先生や、アトラスの那賀先生、先輩の柴田先生をはじめ、若手の先生方の美術科教育への意気込みが、美術科教育の射程、また学会への関わり方の原形のようなものを明確に認識させてくれたと、今でも思っている。本当に思索できる場所、必死でノートを取った記憶がある。夜の懇親会も美術教育の議論である。美術教育は、ゼロ地平から、自分の考え・責任で創造していける。なんと魅力のある仕事なのか。アカデミズムのない混沌からの出発、その模索が楽しかった。５回大会の大阪、７回大会の神戸の発表のおりの、先生方の質問の、まさに大砲で的確にかつ課題付きで撃ってくる。その気持ち良さ。忘れられない思い出である。

もう一つの思い出として、４回大会に話を戻すが、この研究会を学会にするかどうかの議論がなされた。私は現場の人間として、この真剣な発表の場所が学会である方が何かと有効であるといった内容の意見を述べた。その時、若手の大学教官はどちらかというとそういう雰囲気ではなかったように記憶する。語る、対話するということがどういうことなのか、深い読みがあってのことと思う。そもそもこの会はまだ定かではない美術教育の学を模索して「語る」ということが目的であったと思う。

ところで、私は９回大会以後発表はしていない。なぜか。私には、会の膨張とともに次のような発表が目につくようになってくる。発表することだけに意味があるようなノート発表、業績ポイント作りのアリバイ発表、他の学会での発表内容を繰り返す発表、要項を書いてから内容を考え、本発表では言い訳がめだつ発表、現場の研究会そのままの次元設定の題材の発表。そういった内容に出会ったり、話を聞くにつけて、本質＝般若が、単なる方便にすりかわっていく様子が気になりだす。若者を育てるといった言葉での業績作りや、売り込みで何を育てるというのであろうか。少し首をかしげた時期もある。もちろん学会にそういう機能があるにしても、若手であった私には学会が見えなくなり、学会への興味も失せ、割れ切ればそれでもよいものを、昭和20年代生まれの最後としてのこだわり癖が、学会に少しばかり距離をおくように行動させた。

そこへ突然事件が発生した。理事選挙での理事当選。この15人の内に選ばれたことの責任。淀みかけていた脳味噌を洗いかけていたが、本人の行動力といわれればすべてそうだが、まさに「何もない」と表現してもよい状況の田舎の理事。学会はどこで動いているのだろうか。霧の向こうにはあるのだろう。日本の場合、よく話題になるように、多くの事柄が中央の隣組をもとに行われるのは珍しいことではない。だが、それであれば、そこでの会の執行の手法や理念などが明確にされるべきである。もし、そこでの理念や手法が無いのであれば、いったい本学会はなんであろうか。見ようとしていないと批判されるかもしれないが、学会の多くの会場での沈黙は「何かの欠落」を象徴しているのではないだろうか。

無視できないものに現場の先生方の学会批判がある。例えば、社会科の壮絶な論争と現場の巻き込み、構造設定が命である理科のラカトシュやクーンそしてピアジェやポパーなどの構造の探求、数学における発見と試行錯誤や他元論的思考プロセス、それに数と感情など現場のその日の授業にまで浸透しそうな構造展開など、それらを見ると、現場と理論あるいは具体と抽象を上手に往還し、現在の課題を明らかにする内容の研究が幅広く行われている。この一番やっかいな部分を回避して、ある専門に固執して、美術教育学という学の確立を叫んでも、特定の限られた興味の人たちだけの世界、あるいは個人の研究記録の集積はできるが（それも必要ではあるが）、少なくとも日本のエートスからの美術科教育として現場が生きて解釈できる、構造と具体の煮詰めに関係する内容の探求と集積にはなりづらいであろう。現象や表面の広がりとともに、表面の下にある、超越論的現象の構造探しが、メビウスの環のように、現場の具体の質を読み取ることを可能とし、生きた造形、子ども、人格、表現などが絡まった具体を作るのである。そういった内容を基盤とした諸々の展開はさしては議論されないのである。

未来の美術教育の歴史書に20世紀の後半のことは、特に世紀末はどのように記されるのだろう。「人格形成をもくろんだ子どもからの美術教育が展開された」と記されるのだろうか。しかし結局は、造形と世界と人格生成の構造化が、本当にメタ地平でなされることも、現場に還元されることもなく過ぎていくのだろう。もし構造探求なきレベルでの生涯教育という考えのもと、生涯学習の基礎学力の構造も見えず、表面の広がりとともに、いわゆる美術自体次元での「美術の教育」に回帰していくのであれば、美術の終焉とともに奇妙なポストモダンへと突入していくしかないのだろう。

この学会においては、美術科教育の本筋である「現場と子どもからの造形表現の生成」にいろいろな現在的課題が集約され、そういった内容の抽象となる構造まで突き刺す、意味の湧き出しの場を求めていこうとする姿勢こそが大切であると思う。そして、それを意識した会員相互の開かれたダイアローグの構造化がなされる必要があるとも思っている。開かれた構造とは何でもありではないし、またゲリラ的手法でもなく、まさに本学会の中心の学会発表自体の質と内容に収斂していく。ダイアローグの場所としての大会の創造と広がりの場作り。イベントやシステム、祭りではない、深化が動的に構造化される構造生成を具現する学会の必要がある。それこそ学としての美術科教育の探求の重要事項ではなかろうか。

方便としての学会利用の姿勢や、教育に収斂することなき内容が、バランス感覚以上に感じられるとき、まさに方便として語るもの、語らされるもの、またそこでの内容など、それこそ方便としての内容や、付き合いしか出来なくなる気分をはらんでいるのではなかろうか。軽さと優しさが最近までの時代の雰囲気であるとしてもである。やはり、もちろん見えないであろう本質らしき意味を探す努力が必要である。これまでに増して、教育に生き生きした拠所をあたえる展開や企画がもっと多くの発表から見出せることを欲している。世代により学会のイメージは違うだろうが掘り下げること。表面の様な多くの景色はないが、各々の景色のこだわりの背後にある等質の層には、微妙な宝の痕跡があり、その下には骨や内蔵が隠されているのである。この話自体わたしのような情報に乏しい最北の地からの視点ではあるが、一笑に付す前に考えてみてほしい。この会は美術科としての教育の対話から始まったのではなかったのか。どんどん深めるダイアローグを。まさに我々が生涯学習の集団として進まねばならない。

第１７回公開シンポジウム報告

福島大学教育学部　三浦浩喜

去る11月９日土曜日、福島大学ＡＶ教室において、「学校のうちそと・美術のうちそと－地域・学校・美術の境界をめぐって－」というテーマのもとに、第17回公開シンポジウムが開催された。「合校」論や中教審答申、市民による学校批判などによって、にわかに活気づいてきた学校再編論、これに対し現代の学校の意義を確認しながら、美術教育の再定義を試みるものである。

福島という辺地で開催するシンポジウムに、どれだけ人が集まるか当初は懸念されていたが、シンポジウムの当日は学生・院生50人、現場教師63人を含む118人の参加者で会場は埋め尽くされた。特に20～30代の教師たちの姿が目立ち、美術教育の問題意識の高さを察することができた。

シンポジウムに先立ち、川崎市教育委員会の仲野泰生氏によって「市民と美術－川崎市岡本太郎美術館建設を巡って－」と題する講演が行われた。氏は、川崎市に建設が予定されている岡本太郎美術館の開設準備室に在職しており、市民団体の建設反対集会に呼ばれては丁寧に対話を繰り返し、市民と美術の間の垣根を少しずつ低くしていった。ここから日本における「市民」の概念が分析され、戦後市民社会の反省をふまえ、個としての自立という課題が提出された。

午後のシンポジウムではまず、北海道教育大学の佐藤昌彦氏（美術科教育）から美術教育における地域教材の重要性が提起され、民衆文化の可能性が提唱された。福島大学教育学部の三浦（筆者・美術科教育）からは、現代の学校と子どもたちの問題を生活指導の視点からとらえ直し、そこから必然的に導き出される美術教育の姿が提起された。福島県立美術館学芸員（もと高校教師）の真柴毅氏は、教師や高校生の意識が決して美術から遠のいてはいないというアンケート結果をもとに、郡部の高校で活発に繰り広げられている地域行事にリンクした美術教育実践が報告された。続いて霊山子どもの村の斉藤真佐子氏から、地域における造形・文化活動のアイデンティティの確立をめざす「遊びと学びのミュージアム」の興味深い実践が報告された。最後に福島大学教育学部の渡邊晃一氏（絵画）より、美術と教育の一方が他方に従属・吸収されてしまうことなく、主体間のコミュニケーションとしてそれぞれの独自性を突き詰めるべきだという意見が出された。

質疑応答では、福島大学の白沢菊夫教授の舵取りにより、充実した議論を展開することができた。中央に比して文化水準が立ち後れているといわれる福島は、教育のリストラも後れており、逆に中央とは違った意味での可能性がたくさんあることを確認することができた。

福島の地でシンポジウムを成功させた興奮も冷めやらない翌朝、本学の佐久間敬教授が急逝されたことを知った。享年56歳という余りにも短い生涯だった。本シンポジウムの準備にも尽力され、本学に着任してからの教員養成の成果をその目で見るはずだった。しかし、まるでシンポジウムの成功を見届けるようにして逝かれた。

なお、本シンポジウムは学術協力財団より補助金をうけることになっていたが、開催地福島大学の学内事情、および会計処理の困難により、辞退したことを申し添える。

●三浦会員の文章にも記されていますように、本学会理事の佐久間敬先生が急逝されました。生前のご厚意に感謝し、ご冥福をお祈り致します。　（学会本部事務局）

《第１９回美術科教育学会鳴門大会に関連して》

来年の３月２６～２８日の日程で開催されます鳴門大会の詳細につきましては、「鳴門大会開催案内（第二次）」「宿泊案内」「交通機関の案内」「ＷＥの会案内」などを同封してありますので、それらをご一読ください。ここでは鳴門大会での一つの新しい試みを紹介しておきます。

一般の大会参加費を、会員の参加費（4.000円）よりも安い、3.000円にさせて頂きました。世間一般での「会員割引」という感覚からすると逆のように思われるかもしれませんが、色々な方々の新たな参加を期待し、そのように設定してみました。また学部学生の参加費も、同様の思いで、前回大会と同じく 1.000円にしました。

今回このような意欲的な決定をした背景には、大会開催大学関係者の「地域との密接な関わりを大切にしようとする」姿勢があります。学会大会は当番校の独自性を生かした形で行われるべきものであり、今後も様々のケースのあることが予想されます。ご理解のほどお願いいたします。

《「学会通信」へ原稿をお寄せ下さい》

以前から呼びかけていることですが「学会通信」へ記事・原稿をお寄せ下さい。よき会報を実現するためには多様な声が不可欠です。いつも老若男女からの声が届くことを心待ちにしています。今回は北海道教育大学・旭川校の武田薫氏から学会の在り方をめぐる辛口の文章を頂くことができ感謝しています。「学会通信２２号」での藤江・金子両氏の記事からも分かるように、「学会活動はどうあるべきか」の議論は避けて通れないものと思います。図工・美術科の将来が見えない今だからこそ「純粋に知的な路線を進むのか」それとも「行動的な路線を進のか」といったような議論を通信紙上で展開できないものかと考えています。また、出版・美術教育関係のイベントなどのニュースも気軽にお寄せ下さい。掲載いたします。

《ミニ・インフォーメーション》

○長田謙一会員監訳の『芸術あそび』（日本文教出版 3.800円）が出版された。同書はハノーファー（ドイツ）シュプレンゲル美術館における教育活動のドキュメントともいうべきもので、鋭い実践的知性を感じさせてくれる。またそれでいて、絵本のような親しみ深さにも満ちている。原著書の中心的な著者であるウド・リーベルト氏はこれまでに「日独美術館教育シンポジウム」などで来日し、その人柄と話の奥深さで様々な人たちに多大の影響を与えている。

○上山浩会員著の『マルチメディアで遊ぼう』（明治図書 1.860円）が出版された。表現手法とコミュニケーションの拡大という視点に立って、遊び感覚でコンピュータが活用できるよう工夫した実践書であり、平易で的確な解説は子どもたちだけでなく指導者にも示唆するところが多い。構成は次の通り。1.インターネットの魅力　2.パソコンを使って表現　3.インターネットに発信　4.インターネットに接続　5.パソコン理解のすすめ

○花篤實会員が代表の研究プロジェクト「メディア教育・異文化理解教育としての美術教育・映像教材およびガイドラインの開発」に、平成８年度科学研究費補助金（基盤研究Ａ）が交付された（８年度後期採択）。研究スタッフは約10名でいずれも本学会会員。今後３年間にわたり総額約 1.400万円が支給される。その額からして教育学の領域ではビッグプロジェクトに属そう。

《後　　記》

今年ももうじき暮れますが、ぎりぎり滑り込みで「通信」をお送りすることができ、胸をなでおろしています。いつも自転車操業であいすみません。「通信２４号」は新年２月末頃を予定しています。それでは良いお年をお迎え下さい。　　（通信担当　柴田）